「八月十五日　戦争終わる」 関係メモ

●日本の終戦を決めた歴史的な御前会議は８月１４日午前１０時５０分、宮中の地下防空壕で開かれた

▽「終戦の聖断」は 広島・長崎の原爆 ソ連参戦で
　１０日未明の御前会議で 出ていたが
　二度目の聖断を 必要とすることになったのは
　　バーンズ(米国務長官)回答をめぐって
　大きな揺り戻しが 起きていたからだった

バーンズ回答

①「降伏の時より、天皇及び日本国政府の国家統治の権限は、降伏条項実施の為その必要と認むる措置を執る連合軍最高司令官にｓｕｂｊｅｃｔ　ｔｏする」、そのまま訳せば「服属」、「従属」で、外務省は国体論者を刺激しないよう「制限の下に置かるるものとす」とやわらかな表現にした。

②「最終的の日本国政府の形態は、日本国民の自由に表明する意思により決定せらるべきものとす」―　この２点をめぐって戦争継続派が勢いづいた。

●１３日朝の最高戦争指導会議は３対３で対立

▽鈴木貫太郎首相 東郷茂徳外相 米内光政海相は
　聖断に従い 無条件受諾を主張

▽阿南惟幾陸相 梅津美治郎参謀総長 豊田副武軍令部総長は「これでは国体護持が保障されない。
　　再度照会すべきだ」と 譲らず

▽午後の閣議も 受諾賛成が 総理一任を含め１２人
　阿南 松阪広政法相 安倍源基内相の３人が反対
　　閣内の意見一致を 見るに至らなかった

▽鈴木は 重ねての聖断を予告し
　１４日午前１０時から 臨時閣議を開くことに

鈴木首相は終戦へ固い決意

「国体の護持について不安のあることは事実だが、そうだからといって戦争を継続することは、たとえ死中に活があるかも知れないが、それは余りにも危険なことだ。陛下がご聖断をお下しになったのは、もっと高い所から、日

鈴木　貫太郎(すずき・かんたろう)
慶応3(1867)～昭和23(1948) 大阪生まれ。海軍大将。連合艦隊長官を経て昭和4年侍従長、二・二六事件で瀕死の重傷。19年枢密院議長。20年4月首相に就任し終戦に尽力。著に「鈴木貫太郎自伝」

東郷　茂徳(とうごう・しげのり)
明治15(1882)～昭和25(1950)鹿児島県生まれ。駐独・駐ソ大使を経て東条内閣外相。昭和20年鈴木内閣外相、終戦に尽力。東京裁判で禁固20年、拘禁中病死。著に「時代の一面 大戦外交の手記」

米内　光政(よない・みつまさ)
明治13(1880)～昭和23(1948)岩手県生まれ。海軍大将。海相を経て昭和15年首相。19年7月現役に復帰し、小磯・鈴木内閣海相となり終戦に尽力した

阿南　惟幾(あなみ・これちか)
明治20(1887)～昭和20(1945)東京生まれ、本籍は大分県。陸軍大将。昭和4年から4年間侍従武官。陸軍次官、第2方面軍司令官、航空総監を経て20年4月鈴木内閣陸相。敗戦の夜に割腹自決

梅津　美治郎(うめづ・よしじろう)
明治15(1882)～昭和24(1949)大分県生まれ。陸軍大将。陸軍次官を経て昭和17年関東軍司令官、19年参謀総長。東京裁判で終身禁固刑。拘禁中に病死

豊田　副武(とよだ・そえむ)
明治18(1885)～昭和32(1957)大分県生まれ。海軍大将。呉・横須賀鎮守府長官、連合艦隊長官を歴任。昭和20年5月軍令部総長。戦犯として収容され23年釈放

本という国を保存し、日本国民を労わるという広大な思召しによるものと拝察する。私は、このご聖断の通り戦争を終結すべきものと考えるが、今日の閣議の模様をありのままに申し上げて、明日重ねて聖断を仰ぐ所存である」

●問題は、御前会議をどうやって開くか
▽奏請には 首相の外 参謀総長・軍令部総長の署名
▽１０日の時は 内閣書記官長迫水久常が
２人から 期日未記入の奏請状に 署名をとる
▽陸軍中堅幹部が 受諾反対に 時間を稼ごうと反対
通常の手続きでは 署名は得られそうもない
▽鈴木は１４日朝 とっておきの手段を考え 参内
こちらから 開催をお願いするのではなく
前例のない「陛下直々のお召」という形で
▽内大臣木戸幸一は その朝 侍従から
B29が撒いた宣伝ビラを見せられ 愕然とした
▽降伏交渉の条件が 日本語で書き並べてあった
全国の軍隊が これを読んだら どんなことに
降伏阻止に 決起する軍隊が出るだろう
その部隊が 連絡を取り合い 大規模反乱に
▽事態を大きくしないうちに 終戦を断行せねばと
天皇から 御前会議の許可を得たところへ鈴木
▽午前８時４０分 ２人で拝謁して
最高戦争指導会議と閣議の 合同御前会議を
天皇の召集で開くことを お願いした
▽臨時閣議のため 首相官邸に集まっていた全閣僚
統帥部の両総長 平沼騏一郎枢密院議長に
「天皇のお召である」「平服にて差し支えなし
午前十時半までに吹上御苑に参集せよ」

●天皇はこれに先立ち午前１０時から元帥会議
▽永野修身(海軍元帥)は「軍はなお余力を有し、且士気も旺盛なれば、続いて抗戦して上陸せる米軍を断固撃攘すべきであります」と 徹底抗戦論
▽杉山元(陸軍第1総軍司令官)も 同意し
畑俊六(第2総軍司令官)は「たとえポツダム宣言を受諾するにしても、十個師団を親衛隊として残すよう努力する必要があります」

松阪　広政(まつざか・ひろまさ)
明治17(1884)～昭和35(1960)京都生まれ。昭和16年検事総長となり小磯・鈴木内閣法相。戦犯で逮捕されたが釈放

安倍　源基(あべ・げんき)
明治27(1894)～平成1(1989) 山口県生まれ。警視総監、企画院次長を経て鈴木内閣内相。戦犯容疑で23年まで拘置

迫水　久常(さこみず・ひさつね)
明治35(1902)～昭和52(1977)鹿児島県生まれ。岡田啓介元首相女婿。大蔵省銀行局長を経て鈴木内閣書記官長。戦後、衆院、参院議員。池田内閣経企庁長官、郵政相。著に「機関銃下の首相官邸」

木戸　幸一(きど・こういち)
明治22(1889)～昭和52(1977)東京生まれ。侯爵。内大臣秘書官長、文相、厚相を経て昭和15年内大臣。開戦直前、東条英機を首相に推薦。末期には終戦に尽力。東京裁判で終身禁固刑を受けたが30年仮出所。著に「木戸幸一日記」

平沼　騏一郎(ひらぬま・きいちろう)
慶応3(1867)～昭和27(1952) 岡山県生まれ。検事総長、大審院長、法相、枢密院議長を歴任し昭和14年首相。20年4月再び枢密院議長。東京裁判で終身禁固刑。27年病気のため仮出所後、死去

永野　修身(ながの・おさみ)
明治13(1880)～昭和22(1947)高知県生まれ。海軍大将・元帥。海相、連合艦隊長官を経て昭和16年軍令部総長となり、開戦に当たっては海軍部内の強硬意見の代表者となった。19年軍事参議官。戦後A級戦犯に指名されたが裁判中病死

▽天皇の決意は 不動だった
「戦争を終結することに決意したから、軍はこれに服従すべし」と 大元帥命令

●異例の御前会議は地下10㍍の小さな会議室で
▽参列者は２３人 天皇の前に机が置かれただけで机は取り除かれ 玉座に面して３列の椅子に
▽鈴木首相が 第１回聖断以来の経過を報告
「意見はついに一致を見ませんでした。反対の意見ある者より親しくお聞き取りの上、重ねて何分のご聖断を仰ぎたく存じます」
▽指名により 梅津 豊田 阿南の順で
国体護持の不安 いま一戦の必要を 訴えた
▽しばらく沈黙の後 天皇は 静かに口を開かれた
「外に意見がなければ私の考えを述べる」
▽情報局総裁下村宏は 会議後 心覚えをメモし
「終戦記」に 書き残している

二度目の聖断

「反対側の意見はそれぞれ能く聞いたが私の考は此前申したことに変りはない。私は世界の現状と国内の事情とを充分検討した結果、これ以上戦争を継続することは無理だと考へる。国体問題に就て色々疑義があると云ふことであるが私は此回答文の文意を通じて先方は相当好意を持って居るものと解釈する。先方の態度に一抹の不安があると云ふのも一応は尤もだが私はそうは疑ひたくない。要は我国民全体の信念と覚悟の問題であると思ふから、此際先方の申入受諾して宜しいと考へる、どうか皆もさう考へて貰ひたい。更に陸海軍の将兵にとって武装の解除なり保障占領と云ふ様なことは誠に堪へ難い事で夫等の心持は私には良くわかる。しかし自分は如何にならうとも万民の生命を助けたい。此上戦争を続けて結局我邦が全く焦土となり万民にこれ以上の苦悩を嘗めさせることは私としては実に忍び難い。祖宗の霊にもお応へが出来ない。和平の手段によるとしても素より先方の遣り方に全幅の信頼を措き難ことは当然ではあるが、日本が全く無くなるといふ結果にくらべて、少しでも種子が残りさへすれば更に又復興

杉山　元（すぎやま・はじめ）
明治13(1880)～昭和20(1945)福岡県生まれ。陸軍大将・元帥。昭和12年第1次近衛内閣陸相。支那事変で拡大派を支持。参謀総長、教育総監、小磯内閣陸相を経て20年第1総軍司令官。敗戦翌月に自決

畑　俊六（はた・しゅんろく）
明治12(1879)～昭和37(1962)福島県生まれ。陸軍大将・元帥。阿部・米内内閣陸相、支那派遣軍総司令官、教育総監を経て20年第2総軍司令官。東京裁判で終身刑の判決を受けたが29年仮釈放された

下村　宏（しもむら・ひろし）
明治8(1875)～昭和32(1957) 和歌山県生まれ。号は海南。台湾総督府総務長官を経て朝日新聞に入り副社長。二・二六事件後の広田内閣で閣僚候補に挙げられたが、陸軍の反対で実現せず。日本放送協会会長の昭和20年4月、鈴木内閣国務相兼情報局総裁となりポツダム宣言受諾に努力。著に「終戦記」「終戦秘史」

この日も大本営発表はあった

大本営発表(14日午前10時30分)「我航空部隊は八月十三日午後鹿島灘東方二十五浬に於て航空母艦四隻を基幹とする敵機動部隊の一群捕捉攻撃し航空母艦及巡洋艦各一隻を大破炎上せしめたり」

保阪正康さん(現代史研究家)によると、開戦日の「大本営陸海軍部発表(12月8日午前6時)「帝国陸海軍は今八日未明西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり」以来840回目、戦況報告としては最後の大本営発表だった。

遅れた戦闘行動停止命令

第一線部隊は聖断を知らず、徹底抗戦の構えをとっていた。15日になっ

と云ふ光明も考へられる」

真情をこめて途切れ途切れに話される天皇、その頬には涙が流れ、満堂声なく、啜り泣く声のみが聞こえたという。

「私は明治大帝が涙を呑んで思ひ切られたる三国干渉当時の御苦衷をしのび、此際耐へ難きを耐へ、忍び難きを忍び一致協力、将来の回復に立ち直りたいと思ふ。今日まで戦場に在て陣没し或は殉職して非命に斃れたる者、又其遺族を思ふときは悲嘆に堪へぬ次第である。又戦傷を負ひ戦災を蒙り家業を失ひたる者の生活に至りては私の深く心配する所である。此際私としてなすべきことがあれば何でも厭はない。国民に呼びかけることが良ければ私は何時でも「マイク」の前にも立つ。一般国民には今まで何も知らせずに居ったのであるから突然此決定を聞く場合動揺も甚しいであろう。陸海軍将兵には更に動揺も大きいであろう。この気持をなだめることは相当困難なことであらうが、どうか私の心持をよく理解して陸海軍大臣は共に努力し、良く治まる様にして貰ひたい。必要あらば自分が親しく説き諭してもかまはない。此際詔書を出す必要があらうから政府は早速其起案をして貰ひたい。以上は私の考である」

▽しばらくは 顔を上げる者もなく 椅子に金縛りに
▽鈴木首相が立ち上がり 終戦の詔勅案奉呈を述べ
　繰り返し聖断を煩わしたことを 詫びた
▽時刻は正午 天皇が退出されると
　和平派も 戦争継続派も みんな泣いていた
　　子供のように オイオイ泣き出す者
　両拳をしっかり握りしめて 耐えている者
　　床の上に両手をついて 泣いている者もいた

●鈴木、木戸と、天皇の阿吽の呼吸により、通常の国家意思決定の手続きを超越して「終戦・降伏」の決断
▽天皇は 会議後 木戸を呼ばれて
　会議の模様を 涙を浮かばせながら 話された
▽木戸は 日記に
　「私は遂に頭を上げ得なかったのでありました」

ても百里原基地から海軍特攻隊の彗星8機、木更津から流星1機が出撃、関東東方海上で18人が戦死している。

池田　純久（いけだ・すみひさ）
明治27(1894)～昭和43(1968)大分県生まれ。陸軍中将。関東軍参謀副長を経て昭和20年7月内閣綜合計画局長官

林　三郎（はやし・さぶろう）
明治37(1904)～平成10(1998)京都府生まれ。陸軍大佐。駐ソ武官、参謀本部ロシア課長歴任。昭和20年4月陸相秘書官

天皇は終戦には何でもする決心

池田純久（綜合計画局長官）が御前会議が終わり防空壕の外へ出ると、侍従が飛んできて「陛下が陸軍省、海軍省へ行って若い将校たち皆に説明すると言われている」。池田が取り次ぐと阿南は「もうご聖断が下ったんだから、自分が全責任を持つからご安心願いたいと奉答してくれ」、米内も「陸海軍のことは我々でしっかり統帥致します」。しかし、陸軍の宮城乱入事件、海軍厚木基地の反乱は起きた。

阿南自身まだ揺れていた。林三郎（陸軍秘書官）の話では、御前会議のあと阿南に呼ばれて「最後の相談だが、お前の意見を聞きたい。情報では、東京近海にアメリカの大輸送船団が来ているということだ。今、それを叩いてから終戦に持って行く考えはどうだろうか」。林が「終戦の聖断が下っており、思いつきは絶対にいけない」とたしなめると、すぐ思い直したという。このまま戦争を止めるのは残念だ、何とか敵に一撃を与え少しでも有利な講和は、全将兵の気持ちだったろう。

憲法の規定では

聖断はあくまでも天皇の意思表示であって、それが国家の決定になるには、内閣がそれに基づいて全員一致で決議し、改めて天皇の裁可を得てからということになる。だから終戦詔書に、たとえ閣僚が一人でも副署しないと詔書は出せないし、内閣も潰れる。

木戸は「こういう点になると天皇の力は大きかった。我々和平派は、これを聖断という形で最大限に利用した」と話している。

▽政府は 午後１時から臨時閣議で 終戦手続きに

●陸軍省、参謀本部に激震が走った

天皇の涙が阿南を自制させた

阿南は大会議室に省内全将校を集め、訓示した。「ご聖断が下った上は承詔必謹で進むより外はない。軍は一体となり、整斉と終戦処理に邁進し、混乱なからしめること、外地に残された数百万の軍人、同胞の引き揚げと復員に全力を尽くすべきこと」

静まり返った中で突然号泣が起こった。クーデターを計画していた畑中健二少佐(軍務課)で、井田正孝中佐(軍事課)がやむにやまれず「大臣閣下、決心変更の理由を承りたい」。阿南は、こみあげる胸のうちを押し隠すようにしばらく瞑目したあと「陛下御自らのお言葉に対しては、自分としてはこれ以上お返しする術がなかった。特別に陛下からこの阿南に対し、我慢してくれと涙を流されたお姿を拝しては、全てを投げ棄ててお受けする外に道はなかった」

阿南は昭和4年から4年間侍従武官を務めた。天皇も普通は「陸軍次官」と官職名で呼ぶところを、阿南だけは、それも「アナン」と親しみをこめて呼ばれた。この天皇の涙が、阿南に辞表提出、詔書への副署拒否といった、倒閣の手段を思い止まらせたように思う。それでも納まらない将校が大臣室に押し掛けると、「戦争はやめたんだ。ガタガタするな」と叱りつけた。

井田　正孝(いだ・まさたか)

大正1(1912)～　熊本県生まれ。陸軍中佐。軍事課員のときクーデターに参画、重謹慎30日の処分。戦後電通総務課長

陸軍機密電第６８号(8月14日)

「帝国の戦争終結に関する件」

大臣、総長より各軍司令官宛電報

一、帝国は国体の護持、皇土の保衛を完遂し得ることを条件として敵と交渉中なりしも、敵の提示せる条項は右目的達成を著しく困難ならしむるものあり。之が為小官等は敵側提示の条項は到底受諾し得ざるものなることを万策を尽して強烈に主張し又屢々上奏せるも、天皇陛下に於かせられては四国宣言の条項を受諾することに御親裁あらせられたり、右は左の理由に基づくものと拝承し奉る。「内外の情勢特に戦局の推移に鑑み今日にして戦局を収拾せざるに於ては国体を破壊すると共に民族を絶滅するに至るべし。敵の述べる帝国最後の政体は日本国民の自由意志に依り樹立せらるべしと為す条項は帝国の国体を毀損せんとするものとは思考せず。此際は耐え難きを忍びて之を受諾し国家を国家として残し又臣民の艱苦を緩和せんことを冀い給へり」

二、聖断下る。全軍挙って大御心に従い最後の一瞬迄光輝ある伝統と赫赫たる武勲とを辱めず、我民族の後裔をして深く感佩せしむる如く行動すること緊要にして、一兵に至る迄断じて軽挙妄動することなく皇軍永遠の名誉と光栄とを中外に闡明せられんことを切望して止まず。

三、御聖断に従い政府及び大本営は逐次具体的処理を進めらるべきも、停戦に関する大命の発せられる迄は

▽河辺虎四郎参謀次長は
目を血走らせ 泣きながら 行き交う将校に
「本土決戦の作戦ばかりを考えていたが、聖断が下った以上は降伏を混乱なく実行することだ」
▽陸軍首脳の気持ちを ハッキリ 固めねばと
若松只一陸軍次官と相談して 誓約書を作成

「陸軍ノ方針」

「陸軍ハ飽迄御聖断ニ従ヒ行動ス　八月十四日十四時四十分」―― 陸軍首脳会議に集まっていた梅津、杉山、畑、土肥原賢二大将(教育総監)、阿南も閣議から戻って署名した。梅津の「航空部隊の者がざわつく心配が一番多いから航空総軍司令官にもこれを見せておいた方がいいぞ」の注意で、河辺正三大将からも署名をとったが、河辺は暴発しないよう、航空機の燃料を抜くなどの措置をとった。

「陸軍ノ方針」をいち早く固めたことが、宮城事件が発生した際に「承詔必謹に反する行為」として、全陸軍の支持を得ることが出来ず、大事に至らずに終息させる要因となった。

▽阿南 梅津は「大臣、総長より」として
終戦の陸軍機密電報を 各軍司令官に打電

●「正午の玉音放送」は１４日午後４時頃、閣議で決定
▽天皇の放送 ― 日本の歴史上初のアイデアは
久富達夫情報局次長が 8月1日 下村総裁に
「混乱なく終戦には、天皇の大号令しかない」
▽下村が 8日拝謁して申し上げると 天皇も同意

「木戸日記」(8月11日)

…十二時半下村国務大臣来室面談。…三時石渡宮内相(荘太郎)を居室に訪ひ、ラジオにて放送被遊ては如何との意見につき懇談す。三時五十五分より四時十五分迄拝謁ラジオの件に対する聖上の思召は何時にても実行すべしとの御考へなる旨を伝ふ。

▽あらゆる面で 本土決戦態勢が強化されていた時
急転直下 降伏を混乱もなく 受け入れた上で
玉音放送が果たした役割は 絶大だった

依然従来の任務を続行すべきものとす。念の為。又武器の引渡しに関し軍人の名誉を重んずる条件に就きては全面的に努力中なり。

四、小官等は万斛の涙を呑んで之を伝達す。右に関する詔書は明十五日発布せられ特に正午陛下自らラジオに依り之を放送し給う予定なるを以て大御心の程具に御拝察願う。

河辺　虎四郎(かわべ・とらしろう)
明治23(1890)～昭和35(1960)富山県生まれ。陸軍中将。駐ソ・駐独武官、航空本部次長を経て昭和20年4月参謀次長。敗戦で降伏受理打ち合せにマニラに派遣

若松　只一(わかまつ・ただかず)
明治26(1893)～昭和34(1959)愛知県生まれ。陸軍中将。参謀本部第2、総務部長などを経て昭和20年7月陸軍次官

土肥原　賢二(どいはら・けんじ)
明治16(1883)～昭和23(1948)岡山県生まれ。陸軍大将。奉天特務機関長として満州事変の計画に参画、航空総監、教育総監など歴任。東京裁判で絞首刑に

河辺　正三(かわべ・まさかず)
明治19(1886)～昭和40(1965)富山県生まれ。陸軍大将。虎四郎の兄。盧溝橋事件の時、支那駐屯軍歩兵旅団長。ビルマ方面軍司令官を経て昭和20年航空総軍司令官。戦犯容疑で22年まで拘置

久富　達夫(ひさとみ・たつお)
明治31(1898)～昭和43(1968)東京生まれ。東京日日新聞政治部長・編集総務を経て、昭和15年内閣情報局初代次長。日本放送協会専務理事の20年4月、再び局次長となり玉音放送に尽力した

●閣議は「終戦詔書」作成を急いだ

▽草案となったものは 迫水が１１日から起草
最大の特徴は 天皇の言葉を採り入れたこと

漢学者安岡正篤が助言・訂正をした

詔書の白眉ともいうべき「万世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス」は、中国の古典から引用した言葉。迫水が、多くの戦者、殉職者、その家族に対する天皇の思いを「断腸の思いあり」としたところ、安岡から「君、断腸の思いというのは、男女間の離別の時に胸が裂けるようだという意味で使うんだ。こういう時に適当でない」と注意され、「五内為ニ裂ク」と改められた。

▽閣議では 加筆・削除４５か所 文字数１６３字に

草案はこう変わった

安岡は、「今戦争を終結するのは正しい筋道」という見地を示すため「義命ノ存スル所」とした。中国の「春秋左氏伝」、「信以て義を行ひ、義以て命をなす」から採った言葉だが、難解だとして「時運ノ趨ク所」と訂正された。

第三節中ほどの「戦局必スシモ好転セス」は、原案では「戦勢日ニ非ナリ」となっていたのが阿南陸相の強硬な要求で改められた。「負けてしまったのではない。ただ現在、好転しないだけの話だ」と主張、米内海相は「明らかに負けている」と反駁したが、阿南の苦しい立場を知っている鈴木首相はその要求を入れた。

第五節冒頭「常ニ神器ヲ奉シテ爾臣民ト共ニ在リ」も、連合軍に無用な詮索を招くのではないかとの懸念が示され、神器を削除して、代わりに阿南の意見で「国体ヲ護持シ得テ」を挿入した。これにより、国体護持の確信をこちらから表明することにしたのだという。

▽詔書が出来上がり 鈴木首相以下
全閣僚が副署したのは 夜８時半ごろ

▽天皇が署名し 御璽を捺されて 内閣へ返され
終戦詔書は 午後１１時 発布の手続きを終わる

▽同時に 連合国宛 ポツダム宣言受諾電報が
加瀬俊一スイス公使経由で 発送された

石渡 荘太郎（いしわた・そうたろう）
明治24（1891）～昭和25（1950）東京生まれ。平沼・米内・東条内閣蔵相を歴任、小磯内閣書記官長を経て昭和20年宮内相

安岡 正篤（やすおか・まさひろ）
明治31（1898）～昭和58（1983）大阪生まれ。漢学者、国家主義運動家。満州事変後、革新を唱え軍人、新官僚に大きな影響を与えた。戦後、歴代首相の指南役として政・財・官界首脳に信奉者を持った

「義命派になって下さい」

安岡は「無学の人ほど度し難いものはない」と溜め息をついた。迫水が戦後、池田内閣閣僚になった時、こう言ったという。「近ごろの政治には理想がなく、筋道がなく、全く行き当たりばったりのようだが、それというのもあなた方が終戦の詔書の『義命』を『時運』に訂正したことから始まったと言えますよ。時運の趨く所というのは、時の運びでそうなってしまったから、仕方なくということで、理想も筋道もなく、行き当たりばったりということです。目前の損得ということです。あなたも政治家として立たれる以上、時運派にならないで、義命派になって下さい」

加瀬 俊一（かせ・しゅんいち）
明治30（1897）～昭和31（1956）東京生まれ。昭和17年駐伊公使、19年駐スイス公使。戦後は駐メキシコ、駐西独大使

徳川 義寛（とくがわ・よしひろ）
明治39（1906）～平成8（1996） 東京生まれ。尾張藩主慶勝の孫。昭和11年侍従となり、戦後侍従次長を経て60年侍従長。亡くなるまで侍従職参与を務めた

●夜１１時過ぎ、阿南が首相官邸を訪ねて来た

阿南の訣別の辞

阿南は軍刀をつり軍帽を小脇にはさみ、直立不動の姿勢で「終戦の議が起こって以来、私はいろいろ申し上げましたが、総理にご迷惑をおかけしたことを思い、ここに謹んでお詫び申し上げます。私の真意は、一にただ国体を護持せんとするにあったのでありまして、敢えて他意のあるものではありません。この点は何卒ご了解下さいますように」

鈴木が阿南をいたわるように、肩に手をかけて「そのことはよくわかっております。私こそあなたの率直な意見を心から感謝しておりました。みな国を思う真心から出たものです。しかし阿南さん、日本の皇室は絶対にご安泰ですよ。陛下のことは心配いりません」

阿南は涙を流しながら「私もそう信じます」。ポケットから葉巻を取り出して鈴木に贈ったが、玄関まで見送った迫水が戻ると鈴木は「阿南君は暇乞いに来たのだね」

●しかしクーデターは発生した

▽「降伏絶対反対」若手将校の狂信の根は 深かった

▽竹下正彦中佐 椎崎二郎中佐 井田中佐 畑中少佐 みんな 皇国史観・平泉澄東大教授の門下生

クーデター計画は一度は挫折したが…

計画では、①天皇を和平派要人から隔離し戦争継続へ決意を翻してもらうため、東部軍、近衛師団の兵力を使用する②クーデターに全国の部隊を追随させるため大臣、総長、東部軍司令官、近衛師団長、この「四将軍一致の同意」を条件としていた。14日朝、梅津総長の反対がハッキリして計画は崩壊。竹下、井田も断念したが、畑中、椎崎は近衛師団を動かそうと自転車で走り回っていた。

▽１５日午前零時頃 畑中 椎崎が 竹下 井田に「近衛歩兵第２連隊が宮城警護の配置につくので、午前二時を期して蹶起する」

玉音放送の録音が進められた

録音は午後11時20分、宮内省二階の天皇政務室で始まった。放送用の言葉書きは、奉書の紙が柔らかいため、天皇が持ちやすいよう板で裏打ち、また読みやすいように朱筆で句読点を入れた。天皇が読み進むうち「非命ニ斃レタル者及其ノ遺族ニ想ヒヲ致セハ五内為ニ裂ク」の箇所で、しばらく絶句し再び声を励ますようにして続けられたのを、筧素彦（宮内省庶務課長）は居たたまれぬ気持ちで見守ったという。この1回目は声が低かったため、2回目が行なわれ、2組4枚の録音盤は侍従職で預かることになった。（15日の放送で使われたのは2回目のもの）

徳川義寛侍従は、安全には目立たない所がいいと皇后宮事務官室に持って行った。女官室で、壁ぎわのロッカーのような軽金庫に何気なく納めたことが、宮城乱入の兵隊の執拗な捜索から録音盤を守ることになる。

竹下　正彦（たけした・まさひこ）

明治41（1908）～平成1（1989）熊本県生まれ。陸軍中佐。阿南陸相の義弟で陸軍省軍務課内政班長。戦後自衛隊陸将

平泉　澄（ひらいずみ・きよし）

明治28（1895）～昭和59（1984）福井県生まれ。皇国史観の主導者。昭和10年東大教授。陸士、陸大でも日本史の特別講義をして青年将校に大きな影響を与えた

東条　英機（とうじょう・ひでき）

明治17（1884）～昭和23（1948）東京生まれ。陸軍大将。陸相を経て昭和16年10月首相。19年2月参謀総長も兼任したがサイパン陥落で7月総辞職。戦後拳銃自殺を図り未遂。A級戦犯として刑死

▽「近衛師団参謀古賀秀正少佐（東条英機元首相の娘婿）、石原貞吉少佐も同意している。近衛師団長を説得しても聞き入れない時は、斬っても実行する」

▽竹下は 中止を忠告したが 聞き入れないので「近衛師団長と東部軍司令官の両者が起った場合には、阿南に力の限り蹶起を勧めよう」約束して 陸相官邸に向かった

▽井田は 近衛師団長説得を頼まれ 師団司令部へ中央の動静を探ろうと 陸軍省に来ていた上原重太郎大尉（航空士官学校区隊長）も 同行した

近衛第１師団長は殺害された

師団長の森赳（もり・たけし）中将は典型的な武人。彼らも「森は大命でない限り、たとえ大臣の命令でも動かないだろう」と見ていたが、果たして「聖断が下った以上断じて軽挙は許されぬ」と拒絶した。井田が参謀長・水谷一生大佐から説得してもらおうと隣の参謀長室へ行っていると突然銃声。廊下へ出ると、畑中が真っ青な顔で「時間がないのでやりました」

森が椅子から立ち上がった途端、畑中の拳銃が火をふき、上原が軍刀で斬った。かばおうとした白石通教中佐（第2総軍参謀）も斬殺されたが、元帥会議に出席の畑軍司令官に随行、義兄の森を訪ねていてこの難に遭ったものだった。

森は苦痛に呻きながら「自重しなくてはならんぞ、自重しなくては…」と、戒めたという。

▽古賀少佐が 森師団長名の偽師団命令各連隊が 動き出した

●東部軍司令部は午前２時頃、異変発生を知った

▽軍司令官 田中静壱大将は直ちに 各連隊に 軍命令を出し ４時頃車を宮城内に走らせ 直接 鎮圧に乗り出した

▽第１連隊は 営庭に 完全武装の１千人が整列出動直前だったが 石原少佐を逮捕させた

▽乾門で 芳賀連隊長に 第２連隊の配備を解かせ御文庫まで進んで 侍従を通じて天皇に「軍司令官が参りました。もうご心配には及びません」と 伝えさせた

古賀少佐の偽師団命令

▽近歩一は一部を以て竹橋、乾門、三番町口を占領。主力は兵営付近に集結せよ ▽近歩二は宮城内警備。城外との交通遮断▽近歩六は大宮御所警備 ▽近歩七は宮城外苑守備。外部との交通遮断。

宮城内の捜索が始まった

「内大臣はどこか」「宮内大臣はどこか」、兵隊たちの聞き回る声が聞かれたが、午前3時頃事件を知った徳川侍従は、2人を金庫室と呼んでいる地下防空室に隠れさせた。録音を終えた下村情報局総裁ら放送関係者も二重橋の詰所に監禁された。尋問で、録音盤がまだ宮中にあることを知ると録音盤探しが始まった。

徳川は御文庫に急報した帰り、将校に誰何され、30分ほど押問答したが、「斬れ」と言い放つ将校。「大臣はじめ側近がけしからぬ。お前たちは日本精神を持っているのか」「君たちだけが国を守っているのではない。国を守るためには我々が力を合わせて行くべきだ」と言い返すと、いきなり右頬を殴られたという。

田中　静壱（たなか・しずいち）

明治20（1887）～昭和20（1945）兵庫県生まれ。陸軍大将。大尉のときオックスフォード大学に留学。メキシコ、米国大使館付武官、第14軍司令官、陸大校長を経て昭和20年3月東部軍司令官

東部軍命令

一、近衛師団長は一部策動者のために殺害された。二、近衛師団の指揮は別命あるまで東部軍司令官直接これをとる。三、先刻下された師団命令は一部策動者の偽命令である。即刻、こ

阿南の自決

竹下が午前1時頃、陸相官邸に行くと、阿南は奥座敷の蚊帳の中で遺書を書いていた。「自決は今夜でなくてもいいじゃないですか」に「14日は父の命日だ。20日も次男の命日だが、明日の陛下のご放送を聞くのに忍びないから、やはり今夜にしよう」。もう15日になっていたのに、遺書の日付が14日なのはそのせいだった。

2人で飲みだしたが、2時頃、宮城の方で銃声。竹下が初めて畑中、椎崎の蹶起を伝えると「近衛が蹶起しても、東部軍は動かぬだろう。東部軍が動かなければ大丈夫だ」。竹下に親戚や知己、先輩、後輩への伝言を頼み、女中さんを呼んで次々とグラスを飲み干す。井田、林が来て森師団長殺害を報告すると、「このことのお詫びも兼ねて自決するのだ」。井田が「お供します」と言うと「死んじゃいかん、国に尽くせ」と5、6発殴り、2人で相擁して泣いていたという。

4時近くになり純白の真新しいワイシャツに着替えた。侍従武官時代、天皇から頂いたものだった。広縁に座り宮城を向いて腹を切り、短刀で右頸部を突き刺し、前のめりに倒れた。竹下が阿南の軍服を体の上にかけ、遺書「一死以て大罪を謝し奉る 神州不滅を信じつつ 陸軍大臣阿南惟幾」、辞世の「大君の深き恵みに浴し身は 云ひ残すべき片言もなし」を広げて傍に供えた。阿南の体が動いて遺書が血塗れになり、竹下は短刀を頸動脈深く切り込んだ。検視では阿南の絶命は8時頃だった。

●事破れた畑中、椎崎は放送会館(内幸町)に向かった

▽朝5時のニュースの 準備をしていた
館野守男アナウンサーから マイクを奪い
自分たちの真意を 放送させるよう
強要し 懇願もしたが 放送局側から
「警報発令中は東部軍の許可なしには一切
放送できない」と拒否され 7時頃 出て行った

▽予定より遅れて 午前7時21分
館野の「玉音放送予告アナウンス」が 流れた

の命令を取り消す。四、差し当り宮城警護部隊はその囲みを解くべし。

玉音放送予告アナウンス

謹んでお伝えいたします。かしこきあたりにおかせられましては、このたび、詔書を渙発あらせられます。かしこくも天皇陛下におかせられましては、本日正午、おんみずから放送あそばされます。国民は一人のこらず、謹んで玉音を拝しますように。(2度繰り返し)

なお、昼間送電のない地方にも、正午の報道の時間には、特別に送電いたします。また、官公署か事務所・工場・停車場・郵便局などにおきましては、手持ち受信機をできるだけ活用して国民もれなく厳粛なる態度でかしこきおことばを拝し得ますようご手配願います。

ありがたき放送は正午でございます。(2度繰り返し)なお、今日の新聞は、都合により午後一時ごろ配達される所もあります。(3年8か月前、日米開戦の臨時ニュースを放送したのも館野だった)

反乱将校は次々と自決した

玉音放送が始まる直前、畑中と椎崎は宮城前で志を訴えるビラを撒いて拳銃自決した。ビラには「純忠ノ大義ニ生キンノミ」とあった。

古賀は放送が終わった頃、近衛師団司令部二階に上がり、遺骨となった森師団長の霊前で拳銃自決した。

上原はその朝、航空士官学校(現在航空自衛隊入間基地)に戻り、生徒たちを集めて血痕のついた軍服姿で演説した。「候補生たち、よく聞け。今暁二時、近衛師団は蹶起して宮城に入った。和平の詔勅は出されないことになった。それは俺の軍服の血が証明する」。大講堂で放送を聞いた後も、「この詔勅は大御心ではない。君側の奸の仕業だ」

▽２組の録音盤は 午前１０時頃 別々のルートで
放送会館に届けられ 無事 電波に乗ることに

●鈴木首相も１５日早朝、襲撃された
▽横浜市内の警備隊に 応召中の
佐々木武雄陸軍大尉が 午前４時過ぎ
指揮下１個小隊 母校・横浜高工学生ら４０人を
トラックに乗せ 首相官邸を機銃掃射した
▽鈴木は 官邸の官舎が焼失して(5月25日の空襲)から
小石川丸山町の私邸で 寝泊りしていた
▽官邸の電話交換手が 直通電話で 私邸に急報
佐々木たちが 駆け付けた時は
鈴木は 間一髪 裏口から脱出した後だった
▽この直通電話は３日前 １２日に開通したばかり

●３年８か月続いた太平洋戦争、盧溝橋事件から数えれば８年１か月続いた戦争は、ようやく終わった
▽政府は １５日午前零時過ぎ
首相官邸地下防空壕で記者会見 終戦を発表
みんな 泣きながら ペンを走らせた
▽１５日付朝刊の配達は
玉音放送後ということで 午後～夕方にかけて

●正午を前に、内地、外地を問わず、工場で、焼け跡の防空壕で、兵営で、人々はラジオの前に集まった
▽正午の時報に続いて 和田信賢アナウンサーが
「只今より重大なる放送があります。全国聴取者の皆様、ご起立願います」
▽「君が代」奏楽の後 やや甲高い 独特なトーンの
昭和天皇の 終戦を告げる言葉が
静かに 抑揚を伴って 流れ出した
▽放送が終わると
宮城前には 次々と 人々が押し掛けた
▽みんな 目を泣き腫らし 石砂利に
土下座したままの人 慟哭は 何時間も続いた

受けとめ方は、立場、思想、年齢で様々

高見順の「敗戦日記」には、「『ここで天皇陛下が死んでくれとおっしゃったらみんな死ぬわね』と妻が言った。私もその気持ちだった。…やはり戦争終結であった。君が代奏楽、つづい

と、兵器庫を襲って武器・弾薬を奪った。18日、航空総軍司令官河辺大将が説得に乗り出し、深夜、上原が割腹自決してようやく平静に戻った。

逮捕されていた石原は、水戸航空通信学校の急進分子300人が上京、上野の山に立て籠もると、17日、その説得を志願して山に入り射殺された。

佐々木たちのその後

佐々木は「国賊の家は汚らわしいから焼却する」と宣言、ガソリンに火を点けて焼き払ったあと憲兵隊に自首した。憲兵解体が決まっていて、学生ら民間人7人を警視庁に引き渡し、軍人は放免した。学生らは放火罪で実刑判決を受け1年半ほど服役した。

佐々木の方は、事件を引き継いだ警視庁特高部が岐阜県下に潜伏していることを突き止めたが、10月21日、特高も解体され係官が一斉罷免となったため、捜査は打ち切られた。

佐々木はその後、「大山量士(かずひと)」と名前を変え、財団法人「亜細亜友の会」を設立して理事長となり、アジア各国の日本留学生のために寮の世話とか奨学金の斡旋をしたという。

毎日新聞百年史(昭和47年編集)から

〈東京の編集局は押殺された静けさの中にこれを受けた。「ご苦労だったね、これからもしっかりやってくれたまえ」と部下の肩をたたいて、戦争最後の日をねぎらう部長もあれば、もはやペンを折る覚悟を固めて、黙然といすにすわったままの部長もあった。この日だけは締切は午前三時に延ばされた。「聖断拝し大東亜戦終結／四国宣言を受諾／万世の太平を開かん」という十五日の毎日新聞は、夏の夜の白むころまで輪転機が回り

て内閣告諭、経過の発表 ― 遂に敗けたのだ。戦いに破れたのだ。蝉がしきりと鳴いている。音はそれだけだ。静かだ」

山形の疎開先で聞いた斎藤茂吉は日記に「ハジメニ一億玉砕ノ決心ヲ心ニ据エ、羽織ヲ著テ拝聴シ奉リタルニ、大東亜戦争終結ノ御詔勅デアッタ。噫、シカレドモ吾等臣民ハ七生奉公トシテコノ怨ミ、コノ辱シメヲ挽回セムコトヲ誓ヒタテマツッタノデアッタ」と書き、手帳に「『五内為ニ裂ク』と宣ふみことのり すめら民は何をかまうさむ」の歌を認めている。

内田百閒は「熱涙滂沱として止まず、どう云ふ涙かといふことを自分で考へる事が出来ない」。徳川夢声は畳の上に直立不動の姿勢で聞いた。「足元の畳に、大きな音を立てて、私の涙が落ちて行った。私は或る意味に於て、最も不逞なる臣民の一人である。その私にして斯の如し。…日本敗るるの時、この天子を戴いていたことは、なんたる幸運であったろうか。私は歴代天皇の中で、この方ほど好もしきお人がらはないと信ずる」

東大工学部教授富塚清の日記には「来るもの遂に来れり。自分などにとり、これは覚悟の前だが、さて、この瞬間に臨んでみるとちょっと痛々しい気がする。何だか涙ぐましくなる。総理大臣の放送、これには、降伏の条件が述べられている。本州、四国、九州、北海道は残った。まずは万々歳である。一億玉砕にならずにすんだことは幸いである。昼食には、そばがきをたべる。瓜を入れた汁がうまい。新しい日の第一回の食事。のびのびとたべる。これからは一生涯、ウーウーの音を聞かずにすむだろう。これだけは、いくら慣れても、肺腑をえぐられるような、いやな音だった。風もなく至って平穏である」。奥さんに「今日は赤飯をたこうじゃないか。もっとも、敗戦を祝ったなんていうと人聞きがわるいから、名目は月おくれのお盆ということにするさ。本心は生き残ったことことのお祝いということだがね」。夕食に顔を揃えた時、誰言うとなく「おめでとう」

続けた。第一面は詔書をトップに、内閣告諭、異例の御前会議、ポツダム・カイロ両宣言全文など、そして社説、二面には、原子爆弾ニュースがほとんど全面を埋めて特集された。内・蔵相の談話のほか、まだ「空母、巡艦を大破」という大本営発表や「B29中部、西部軍管区へ来襲」その他の戦況記事が掲載された。新聞の百八十度転換は見事に行なわれた。戦況記事は片隅にひっそりと固まっていた〉

大阪本社編集局については、社会部デスク藤田信勝（のち論説顧問）が、日記「敗戦以後」にこう書いている。〈今夜の社内は、さすがに興奮してゐる。三階の客室で社会部の同僚がビールと酒で興奮してゐた。「暗幕をとってしまへ、戦争はすんだんだ！」「最後の夜！歴史的な夜！OK！」興奮と怒号。

しかし、このやうな興奮はむしろ社内で例外的で、連絡部では送稿して来る原稿を総がかりでとってゐる。整理部も全員配置についてゐる。むしろ冷静に仕事をつづけてゐる。降伏の新聞をつくるために、こんなに落ちついて仕事がつづけられるといふことをわれわれはかつて考へ得たであらうか。われわれはドイツの降伏のやうな形を考へてゐた。しかし、今われわれの眼前の事態はまるで違ふ。抗戦を主張した政府によって！宣戦を布告遊ばされた天皇陛下によって！そして必勝を叫びつづけた同じ新聞によって！いま静かに、何の混乱もなく降伏が発表されてゐる。想像されなかった不思議な事態がいまおこりつつある。

深夜近くになって、ポツダム宣言の全文が送られてきた。降伏の条件なのだ。連絡部長が速記者から渡される原稿を一枚々々受けとって「バカ

加藤周一さんは東大内科の医師をしていて、信州上田の結核療養所で聞いた。「数十人の看護婦たちは ― みんな土地の若い娘であった ― 何ごともなかったかのように、いつもの昼食の後と少しも変らず、賑かな笑い声を立てながら、忽ち病室の方へ散っていった。戦争は遂に ―― どんな教育にかかわらず、またどんな宣伝にもかかわらず、娘たちの世界のなかまでは浸みこんでゆかなかったのである。…今や私の世界は明るく光にみちていた。夏の雲も、白樺の葉も、山も、町も、すべてはよろこびに溢れ、希望に輝いていた。私はその時が来るのを長い間のぞんでいた。しかしまさかその時が来ようとは信じていなかった。すべての美しいものを踏みにじった軍靴、すべての理性を愚弄した権力、すべての自由を圧殺した軍国主義は、突然、悪夢のように消え、崩れ去ってしまった ― とそのときの私は思った。…私は歌いだしたかった」

河上肇は病床で「あなうれし とにもかくにも生きのびて 戦やめるけふの日にあふ」

子供の世界は素早く希望を

手塚治虫は16歳だった。「家の外で話し声がする。『戦争が終わったんですって』『まあ、ほんと』ゲッとなって、ラジオを大きくした。― 敗戦だ! ― 終わったんだ、終わったんだ ― ぼくは、とっさに、こりゃ、もしかしたら漫画家になれるかもしれんぞ、と思った」

信州に疎開していた目黒区月光原小「学童疎開の記録」には、「先生方は応接室に集まり、ただ放心したようにだまって別れた。寮へ帰ってみると、いつもより子供たちの顔は明るく、敗戦のくやしさは少しもない。ずるそうに私たちの顔を見ている。だれいうとなく『家に帰れるそうだ』、何のあてもない生活に明るい希望が湧いたのだろう。むっつりとだまり込んでいる先生方に気がねしながらも、子供たちの身動きの端々に『張り』が出てきたようだ」

たれ!」とひとりごとしながら興奮してゐた。彼の息子は海軍特攻隊にゐるはずだ。武装なき日本に、米、英、中国の武装軍隊が駐兵した時、果してどんな状態になるか。想像するだにそらおそろしい。新聞社は今日の形では存在することはできないであらう。新聞記者を一生の仕事して選び、新聞記者として働き、新聞記者として死ぬことをただ一つの人生の目的とした僕にとっても、すべてが終りなるかも知れぬ〉

整理部デスクの一人が「もう明日は出勤しなくていいんだろうな」と声をあげた途端、編集局長本田親男(のち社長)の「明日も来いよ、今まで通り」の声がはね返ったという。

高見　順(たかみ・じゅん)本名 高間芳雄
明治40(1907)～昭和40(1965)福井県生まれ。作家・詩人。代表作に「故旧忘れ得べき」「激流」「いやな感じ」詩集「死の淵より」。死後、文化功労者を追贈

斎藤　茂吉(さいとう・もきち)
明治15(1882)～昭和28(1953)山形県生まれ。歌人。歌集「赤光」「あらたま」「ともしび」「白き山」。昭和26年文化勲章

内田　百閒(うちだ・ひゃっけん)本名 栄造
明治22(1889)～昭和46(1971)岡山県生まれ。「百鬼園随筆」など、随筆家最高峰の一人と称えられる。紀行「阿房列車」

徳川　夢声(とくがわ・むせい)本名 福原駿雄
明治27(1894)～昭和46(1971)島根県生まれ。芸能家・随筆家。NHKで「宮本武蔵」を連続放送し、話芸は天下一品と称された。著に「夢声戦争日記」

「戦後」も始まっていた

林健太郎さんは一高教授の31歳の時、二等水兵として横須賀の海兵団に入隊したが、敗戦とわかると「とたんに兵営内の空気は一変した。急にいろいろな物資が配給され、夜は至る所で酒宴が開かれて歌声が兵舎に響き渡った。敗戦を喜んでいるのでもなく自棄になっているのでもない。要するに急に自由になったので、出来ることでしたいことを先ずしたということだろう。その中をトラックが音を立てて走り回った。最初は意味がわからなかったが、下士官あたりの海兵団の実力者が酒保の物資を持ち出して、後日の闇商売に使ったということだった」(昭和史と私)

安岡章太郎さんが午後1時頃、新宿へ出ると、いつもなら尾津組の露店が並んでいて針、櫛、安全カミソリを売っているのに、敗戦で自粛したのか一軒も出ていない。ところが裏通りに回ると、電柱の陰に手拭いを頭に巻いた男がいて、小柄な老人から金を受け取ると小さな包みを渡している。ポケットにあった20銭を渡したところ、隠すように手渡したのが煙草の「光」。煙草は1週間に1箱ぐらいの配給。「真っ昼間、専売局のちゃんとした煙草を公道で売っているのは、やっぱり戦争が終わった証拠だな」と思ったという。安岡さんは「翌日も朝から晴天だった。新宿駅の雑踏はひどく、きのうは自粛していた尾津組の露店も表の電車通りに沿って立ち並び、その周りに盛り場の活気めいたものが漂っていた」(僕の昭和史)

●毎日新聞編集総長・高田元三郎は玉音放送の後、東京本社の社員会議で「新聞人の責任と自覚」を訴えた

毎日新聞「社報号外」から

「いまわれわれは戦には敗れましたが、この大きな戦訓を活かして、よしわれわれの時代に皇国の再建が不可能であっても、われわれの次の時代において立派にこれができる基礎を、今日只今からこの焦土の上に築き上げねばならぬのであります。これがわれわれに残された大きな義務であり、使命であります。国

富塚　清(とみづか・きよし)
明治26(1893)～昭和63(1988)千葉県生まれ。東大工学部教授の時「三年会」(戦後日本を考える会)に参加。戦後、明大、法大教授。「ある科学者の戦中日記」

加藤　周一(かとう・しゅういち)
大正8(1919)～　東京生まれ。評論家・作家。ベルリン自由大、上智大などで教壇に立ち、「日本文学史序説」小説「ある晴れた日に」回想録「羊の歌」

河上　肇(かわかみ・はじめ)
明治12(1879)～昭和21(1946)山口県生まれ。経済学者、社会思想家。大正4年京大教授となり、翌年大阪朝日に「貧乏物語」を連載。共産党に入党、昭和8年検挙され、出獄後は自叙伝など執筆に専念

手塚　治虫(てづか・おさむ)本名 治
昭和3(1928)～平成1(1989)兵庫県生まれ。大阪大医学部在学中、アルバイトに描いた漫画がヒット、「鉄腕アトム」「ジャングル大帝」「火の鳥」など児童漫画、アニメーションに数多くの業績を遺す

林　健太郎(はやし・けんたろう)
大正2(1913)～平成16(2004)　東京生まれ。西洋史学者。一高、東大教授、昭和48年東大学長。58年参院議員

安岡　章太郎(やすおか・しょうたろう)
大正9(1920)～　高知県生まれ。作家。昭和28年「陰気な愉しみ」「悪い仲間」で芥川賞。第三の新人の代表者と目された

毎日新聞の「竹槍事件」

19年2月23日付朝刊に、「勝利か滅亡か／戦局は茲まで来た／竹槍では間に合はぬ／飛行機だ海洋航空機だ」海軍省担当キャップ新名丈夫(しんみょう

民はこれから暗夜の道を行くのであります。暗夜の行路を行く国民に燈火を与へるものは誰でありませうか。私は新聞であり、新聞人であると信じます」

▽１６日付 大阪本社社会面トップに
「玉音放送を拝して」を書いたのは 井上靖

「今日も明日も筆をとる!」

「十五日正午－ それは、われわれが否三千年の歴史がはじめて聞く思ひの『君が代』の奏でだった。…日本歴史未曾有のきびしい一点にわれわれはまぎれもなく二本の足で立ってはゐたが、それすらも押し包む皇恩の偉大さ－すべての思念はただ勿体なさに一途に融け込んでゆくのみだった。…詔書を拝し終るとわれわれの職場毎日新聞でも社員会議が二階会議室で開かれた。… 一億団結して己が職場を守り、皇国再建へ発足すること、これが日本臣民の道である。われわれは今日も明日も筆をとる!」。井上は38歳。この原稿を整理部デスクに渡すとき、「この記事を書くために俺は新聞社に入って来たんだ。そして、いま、これを書いた。もう、これでいい。これ以上のものを書くことがあろうとは思わぬ」

●玉音放送が終わった後も特攻機は出撃した
▽１５日夕方 第５航空艦隊長官 宇垣纏中将が
大分基地から 彗星(艦上爆撃機) １１機を率い沖縄へ
▽海軍総隊は その朝
「沖縄積極攻撃中止」を 命令していたが
放送後 中都留達雄(なかつる・たつお)大尉に出撃命令

宇垣は日記「戦藻録」(8月15日)に

「間もなく呉鎮を通じＧＢ(海軍総隊)は当司令部に対し対ソ及対沖縄積極攻撃を中止すべく命ず。愈々降伏を裏書するに似たり。最後迄戦うべきに本指令は我意を得ざるなり。…茲に於て当基地所在の彗星特攻五機に至急準備を命じ、本職直率の下沖縄艦船に特攻突入を決す」
参謀長らが説得しても宇垣は「俺に死に場所を与えてくれ」と繰り返すだけ。食堂で宴席が用意され、日記に筆を走らせていた宇垣は「一

・たけお)記者が、敵が飛行機で攻めてくるのに、いくら家庭の主婦まで動員して竹槍訓練をさせても竹槍では戦えない ― 当然至極のことを書いたのだが、東条首相は激怒した。
「陸軍の作戦をバカにした」と、極度の近眼で兵役免除になっていた37歳の新名を二等兵として懲罰召集し、情報局に毎日新聞の廃刊を迫った。結局は編集局長辞職、発禁処分ですんだが、戦争中は軍部の要求以外には何も書けなかった時代だった。

井上　靖(いのうえ・やすし)
明治40(1907)～平成3(1991) 北海道生まれ。作家。昭和11年大阪毎日新聞に入社。学芸部勤務の傍ら、24年「闘牛」で芥川賞。26年退社し作家活動に専念。「淀どの日記」「氷壁」「天平の甍」「敦煌」「楼蘭」「本覚坊遺文」。51年文化勲章

宇垣　纏(うがき・まとめ)
明治23(1890)～昭和20(1945)岡山県生まれ。海軍中将。軍令部作戦部長を経て昭和16年山本五十六連合艦隊長官の下で参謀長。20年第5航空艦隊長官となり終戦の日、沖縄へ特攻攻撃して戦死。遺稿に日記「戦藻録」

山本　五十六(やまもと・いそろく)
明治17(1884)～昭和18(1943)新潟県生まれ。海軍大将。海軍次官時代、日独伊三国同盟に反対。昭和14年連合艦隊長官となり真珠湾攻撃を立案・実行。18年4月、ソロモン諸島の海軍基地視察中に米軍機に撃墜され戦死。国葬。死後元帥

小沢治三郎(海軍総隊長官)は激怒した

「軍の指揮系統は大命の代行であり私情を以て一兵たりとも動かしてはならぬ。玉音放送で終戦の大命が下

六〇〇幕僚集合、別盃を待ちあり。之にて本戦藻録の頁を閉ず」。飛行場で宇垣を待っていたのは、5機ではなく11機22人の搭乗員だった。宇垣が「5機のはずだが…」と尋ねると、中都留は「長官が特攻をかけられるというのに、たった5機とは何事ですか。私の隊は全機でお供します」。彗星は複座、2人乗り。宇垣が「操縦員だけでよい、偵察員は残れ」と言っても、偵察員も「私たちは操縦員と生死を共にして訓練してきました。私たちだけが残ることは出来ません」と口々に訴えた。

▽午後５時出撃　３機は故障で引き返したが
　中都留機など８機　１７人は戻らなかった
▽中都留は海兵７０期　２３歳
　前月　長女が生まれたばかり
　　みんな　まさに　これからの若い命だった

●海軍厚木基地の戦闘機は１６日、東京など首都圏に「徹底抗戦」のビラ数万枚をばら撒いた

「国民諸子ニ告グ　海軍航空隊司令」

「赤魔ノ巧妙ナル謀略ニ翻弄サレ必勝ノ信念ヲ失ヒタル重臣閣僚共ガ上聖明ヲ覆ヒ奉リ下国民ヲ欺瞞愚弄シ遂ニ千古未曾有ノ詔勅ヲ拝スルニ至レリ。…天皇ノ軍隊ニハ降伏ナシ。我等航空隊ノ者ハ必勝ノ確信アリ。今コソ一億総蹶起ノ秋ナリ」

▽１７日には　北海道から九州にも撒布

「厚木起つ」は全海軍を衝動させた

第302航空隊は零戦、月光、彗星、銀河、彩雲など170機、人員5500人を擁する帝都防空部隊。地下格納庫や弾薬庫には、2年は持つといわれた豊富な弾薬、食糧を備蓄。この部隊がフルに抗戦派へ注ぎ込まれたら終戦など吹き飛んでしまう。司令の小園安名（こその・やすな）大佐は歴戦の戦闘機パイロット。皇国史観・平泉博士の熱烈な信奉者で若い時から神懸かりの精神家として知られていた。

玉音放送後、炎天下に整列した隊員に「日本されたのち、部下を道連れにするなど以ての外。自決して部下の後を追うというなら、一人でやれ」

小沢　治三郎（おざわ・じさぶろう）

明治19（1886）～昭和41（1966）宮崎県生まれ。海軍中将。南遣艦隊長官、第3艦隊長官を経て昭和19年軍令部次長。20年5月海軍総隊長官兼連合艦隊長官

海軍の処置

中都留機の突入電報と共に、宇垣が出撃前に用意した電文「皇国武人ノ本領発揮、驕敵米艦ニ突入轟沈ス」が指揮下各部隊に打電された。中都留機が水上機母艦カーティスに体当りしたとの説もあるが、「米海軍作戦日誌」（米海軍公式記録）にその記述はない。

特攻戦死者は普通2階級特進するが中都留たちは1階級進んだだけ。宇垣も大将に進級することなく中将のままだった。連合艦隊の10月1日付文書「特攻隊員として詮議せられざりし者の件通知」には「一般戦死者として扱う」となっており、玉音放送後の出撃がこの処置となったとみられる。

厚木鎮圧は２６日

小園は16日深夜、ラバウルでかかっていたマラリアが再発し高熱で倒れた。18日朝には褌姿で外へ出て「俺は天照大神」などと叫んだため、軍医が麻酔薬を注射。21日朝、三浦半島の海軍病院精神病棟に収容された。

302空の抗戦態勢は指揮官を失って急速に崩れていった。若手士官、下士官、兵の32機が陸軍の狭山、児玉飛行場に脱出したが、説得されたり、タイヤを切られて飛行不能になったりして、反乱は26日に終息した。

の軍隊は解体したものと認める。これからは、国民の自由意志によって国土を防衛する国民的自衛戦争に移ったわけだ。私と共にあくまで戦うという者は留まれ、しからざる者は帰郷せよ」と訴えた。隊列を去る者はなく厚木基地は一致して戦闘態勢に移り、午後2時指揮所の吹流し塔には「菊水」の旗が掲げられた。

厚木は進駐米軍の玄関口。海軍は懸命に説得し、頑として聞かない小園を解任したが…。

●自決者は、大将から二等兵に至るまで、民間人を入れると６００人を超えた

大西滝治郎軍令部次長の自決

16日未明、次長官舎で割腹した。軍医に「生きるようにはしてくれるな」と頼んだが、すでに腸がはみ出していた。聖断前日の13日深夜、首相官邸で話し合っていた東郷外相、梅津、豊田両総長に、「2千万人を殺す覚悟で、これを特攻に用いれば決して負けることはない」

2千万といえば、働き盛りの男子の総数。狂気に取り憑かれていたとしか思えないが、「特攻隊の英霊に曰す」で始まる遺書には「一般青壮年に告ぐ。我が死にして軽挙は利敵行為なるを思ひ、聖旨に副ひ奉り、自重忍苦するの誡(いましめ)とならば幸なり」。急報で駆け付けた児玉誉志夫にも、「貴様のくれた刀が切れないばかりに、また貴様と会えた」と軽口を叩きながら「厚木の航空隊を抑えてくれ。小園に軽挙を慎めと、大西が言ったと伝えてくれ」と頼んでいる。大量の血を吐いて絶命したのは午後6時頃で、辞世は「之でよし百万年の仮寝かな」

▽特攻関係者の死は続く

・１５日 比島で 陸軍最初の特攻を実施した
　隈部正美少将(第4航空軍参謀長)が 家族４人と
・翌日 特攻機の爆装計画担当の水谷栄三郎大佐
・１８日昼過ぎ 「桜花」考案の大田正一中尉が
　零戦で 鹿島灘方面へ飛んだまま 戻らず

●東部軍司令官田中静壱大将は２４日深夜、拳銃自決

横須賀鎮守府臨時軍法会議で

小園は10月、無期禁固の判決を受けその後減刑されて仮釈放になったのは25年暮れ。下士官、兵には執行猶予がついたものの士官25人は党与抗命罪で禁固8～4年。大赦により、21年暮れから22年1月に仮出獄し、法相の特赦状で刑は失効、罪名も消滅した。

悲しい自決もあった

飛行長・山田九七郎大尉が小園入院の翌日、夫人と服毒自殺した。山田は愛する女性を小園の養女として結婚していた。陸海軍将校の結婚には厳密な身元調査があり、例えば遊廓の女性には許可が出ないから、然るべき人の養女として届け出ていた。

ただならぬ小園の恩顧と、聖断に従わねばという気持ちの板挟みになって、自決の道を選んだのだろう。

大西 滝治郎(おおにし・たきじろう)

明治24(1891)～昭和20(1945)兵庫県生まれ。海軍中将。軍需省航空兵器総局総務局長を経て、昭和19年第1航空艦隊長官となりレイテ沖海戦で神風特攻隊を出撃させる。20年5月軍令部次長に就任し、終戦に最後まで反対、自決した

児玉 誉志夫(こだま・よしお)

明治44(1911)～昭和59(1984)福島県生まれ。右翼運動家。昭和6年、井上準之助蔵相暗殺を計画して検挙され、出獄後、参謀本部嘱託として大陸に渡る。16年、児玉機関を設立し海軍の物資調達に当たる。戦後公職追放となり、解除後は右翼団体指導者、政界の黒幕として活動。ロッキード事件(51年)で起訴されたが、死亡により免訴となる

▽早朝 予科士官学校(埼玉県朝霞)生徒６０人余りが
　海外に 徹底抗戦を放送しようと
　　川口の国際無線放送局を 襲撃した
▽田中は すぐ車を走らせ 天皇苦悩の言葉を引いて
　「今後は日本の復興のために尽くせ
　　諸子の前途は永い」と 懇々と諭した
▽生徒を解散させ 軍司令部(第一生命ビル)に戻ると
　近衛師団鎮圧の際 天皇から受けた言葉を清書
　　辞世は「聖恩の忝けなきに吾は行くなり」

安達二十三第１８軍司令官は２年後

第18軍が戦ったニューギニアは、14万将兵のうち戦死11万。大部分が栄養失調による餓死、マラリアにによる戦病死で最も悲惨な戦場。安達は部下の戦犯裁判の弁護、証言に尽力、部下の行為は自分の責任として無期禁固の判決を受けた。一切の裁判が終了した22年9月10日ラバウルの戦犯収容所で自決した。それも、軍刀をはじめ一切の刃物が取り上げられた中、金鋸で秘かに作った長さ12㌢のナイフで作法通りに腹を切った後、確実に死ねる方法として縊死したものだった。辞世は「北の空に冴ゆる月影眺めけり 月は南と思いしものを」

▽杉山元元帥(第1総軍司令官)は９月１２日 拳銃自決
　連絡を受けた啓子夫人も 短刀で後を追った
▽本庄繁大将は 戦犯指名の１１月２０日
▽ＧＨＱが 戦犯容疑者逮捕を開始した９月１１日
　東条英機元首相は 拳銃で左腹部を撃ったが
　　ＭＰに救出され 未遂に終わる
▽閣僚経験者では
　小泉親彦元厚相(9月13日) 橋田邦彦元文相(9月14日)
▽近衛文麿元首相は１２月１６日 荻外荘で服毒

柴五郎陸軍大将も自決した

義和団事件(明治33年)で北京の各国公使館が包囲された時、清国公使館付武官・柴中佐が籠城戦の指揮をとった。ロンドン・タイムズ特派員モリソンにより欧米の新聞には連日「Colonel Shiba」の見出しが躍り、イギリスの日英同盟締結(35年)には、規律正しく勇敢な日本軍に対する信頼も、その要素になったといわれる。

人間爆弾「桜花」

大田は昭和3年海兵団入隊の叩き上げ。戦局挽回の必中兵器として、木製小型機(1人乗り)に1200㌔爆弾を搭載、一式陸上攻撃機の胴体に吊して目標近くまで運ぶとロケット噴射により敵艦に体当りさせる「桜花」を提案、採用された。しかし、米機動部隊が沖縄沖に迫った3月20日、「桜花」15機を搭載した一式陸攻18機は目標到達前に全機撃墜された。大田33歳、海軍は航空殉職として大尉に進級させた。

田中が受けた天皇の言葉

「今朝ノ軍司令官ノ処置ハ誠ニ適切デ深ク感謝ス。今日ノ事態ハ真ニ重大デ、色々ノ事件ノ起ルコトハ固ヨリ覚悟シテ居ル。併シカクセネバナラヌノデアル。田中ヨク頼ム。シッカリヤッテ呉レ。声涙共ニ下ラセ給フ。
　八月十五日午後五時十五分
　　於・御文庫」

安達　二十三(あだち・はたぞう)
明治23(1890)～昭和22(1947)東京生まれ。陸軍中将。北支那方面軍参謀長を経て昭和17年11月、第18軍司令官

本庄　繁(ほんじょう・しげる)
明治9(1876)～昭和20(1945) 兵庫県生まれ。陸軍大将。昭和6年関東軍司令官、満州事変の指揮をとる。8年侍従武官長

小泉　親彦(こいずみ・ちかひこ)
明治17(1884)～昭和20(1945)福井県生まれ。軍医中将。近衛、東条内閣厚相

橋田　邦彦(はしだ・くにひこ)
明治15(1882)～昭和20(1945)鳥取県生まれ。一高校長経て近衛、東条内閣文相

「この戦いは負けです。日本は信用と面子を尊ぶ中国人をさんざん裏切った」と言い続けていたというが、9月15日に割腹自決を図り12月23日に86歳の生涯を閉じた。

▽甘粕正彦元憲兵大尉は新京で「大ばくち、もとも子なく、すってんてん」の遺書を残し 服毒(8月20日)

敗戦を嘆いた右翼の集団自決も

尊攘同志会の10人は愛宕山に立て籠もり「バドリオ内閣を倒せ」と気勢を挙げていたが、警視庁が実力解散に踏み切った8月20日、手榴弾を同時に爆発させて全員が自決、5日後には未亡人2人が同じ場所で後追い自殺をした。

23日に皇居前で明朗会の14人。日本郵船高級船員の従業員組合で、「天皇に再度宣戦布告を奏請する大国民運動を展開しようと」と訴え、割腹、服毒自決。25日には代々木練兵場で大東塾員14人が、和服正装姿で割腹自決した。

●鈴木内閣は終戦手続きを終え、１５日午後総辞職

▽天皇は「ご苦労をかけた。本当によくやってくれたね」と ねぎらいの言葉を 二度繰り返された

▽１７日には 東久邇内閣がスタート

▽１９日 降伏打ち合せのため マニラに
河辺虎四郎参謀次長を団長に 使節団派遣

▽連合軍最高司令官マッカーサー元帥は
台風のため予定が遅れ 厚木到着は２７日

●９月２日、東京湾の戦艦ミズーリで降伏文書調印式

▽全権には 政府を代表して 重光葵外相
軍部を代表して 梅津参謀総長

▽全権団１１人は 午前４時 首相官邸に集まり
冷酒の乾杯をした後 横浜港に向かった

加瀬俊一さんは話している

横浜港埠頭には、出迎えの駆逐艦ランスタウンが待っていた。艦長スミス・ハットン大佐は開戦時の米国東京大使館付武官。加瀬さんとも家族ぐるみの付き合いをした仲、配慮が嬉しかったという。ミズーリに接近しランチに乗り移ったが、重光は義足。容易でないと見た

近衛　文麿(このえ・ふみまろ)

明治24(1891)～昭和20(1945)東京生まれ。公爵。昭和12年首相となり直後の支那事変収拾に失敗。15年第2次内閣で日独伊三国同盟を締結。第3次内閣で日米交渉に努めたが、16年10月総辞職した

近衛の遺書

「僕は支那事変以来多くの政治上過誤を犯した。之に対し深く責任を感じて居るが、所謂戦争犯罪人として米国の法廷に於いて裁判を受ける事は堪へ難い事である。殊に僕は支那事変に責任を感ずればこそ、此事変解決を最大の使命とした。そして此際解決唯一の途は米国との諒解にありとの結論に達し日米交渉に全力を尽くしたのである。その米国から今戦争犯罪人として指名を受ける事は、誠に残念に思ふ」

柴　五郎(しば・ごろう)

安政5(1859)～昭和20(1945)陸軍大将。会津藩士の家に生まれ戊辰戦争に敗れて下北半島で悲惨な少年時代を送る。陸軍幼年学校に入り駐英・駐清国武官、台湾軍司令官を歴任し大正12年予備役

甘粕　正彦(あまかす・まさひこ)

明治24(1891)～昭和20(1945)山形県生まれ。陸軍大尉。麹町憲兵分隊長のとき関東大震災(大正12年)の混乱に乗じ、無政府主義者の大杉栄夫妻ら3人を殺害。軍法会議で懲役10年の刑を受けたが昭和2年出獄。満州に渡り満州事変の陰謀に加わり、14年満州映画協会理事長

東久邇　稔彦(ひがしくに・なるひこ)

明治20(1887)～平成2(1990) 東京生まれ。陸軍大将。終戦後に初の皇族内閣を組織し降伏文書調印、軍隊の復員・軍解体など終戦処理を行なった

ハットンは「力自慢の者4人を集めろ」と命令、屈強な水兵が重光を前後から抱き抱えたが、黒山の水兵が歴史的な写真を撮ろうとカメラを構えていた。重光の「撮影しないよう断ってくれ」との依頼で、加瀬さんが申し入れると、ハットンは即座に撮影禁止を命令した。

海軍随員の富岡定俊少将は「どんな侮辱的な扱いを受けるかと覚悟していたが、これは大分見当が違ったぞ」と、心を打たれたという。

▽式場には ペルリ来航(嘉永6年=1853)の際の星条旗

マッカーサーの演説

「理想や理念の紛争はすでに戦場に於いて解決された」と前置きして「我々は猜疑や悪意や憎悪の気持ちに促されて今日ここに相会するものではく、過去の流血と破壊の中から、信頼と理解に基づく新しい世界を招来しようと念ずるものである」。そして自由と寛容と正義の精神を強調し、「占領軍最高司令官の義務を寛容と正義によって履行する決意である」

▽午前9時4分 重光 梅津が 漢字で署名
戦勝国代表が署名して 調印式は終わった

▽加瀬さんは報告書の結びを「もし日本が勝っていたら、果たして今日マッカーサー元帥がとった態度をアメリカに対して示し得たでしょうか」

加瀬さんの言葉

「支那事変以来、わが軍は陸に海に空に善戦し、国民も犠牲を忍んで困苦に堪えたのに、遂に敗戦の憂き目を見たのは、敵の巨大な物量に圧倒されたからだけではない。それもさることながら、それよりも軍部の暴走を許した国民倫理に大きな欠陥があった。いま敗戦によって国民がこの事実に思い至れば、それがとりも直さず、再起の大道に連なるのである。元帥の演説は、暗黒を貫く一筋の光明だったといってもよかろう」

●鈴木は 23年4月17日未明 肝臓ガンで死去

▽うわごとのように しかし はっきりした声で
「永遠の平和、永遠の平和」と 二度繰り返した

重光 葵(しげみつ・まもる)

明治20(1887)～昭和32(1957)大分県生まれ。昭和7年中国公使のとき爆弾を投げられ右足を失う。18年東条内閣外相。戦後東久邇内閣外相、降伏文書調印。東京裁判で禁固7年。27年鳩山内閣外相となり、日ソ国交回復、国連加盟を実現

加瀬 俊一(かせ・としかず)

明治37(1904)～平成16(2004)千葉県生まれ。昭和15年松岡外相秘書官。開戦時は北米課長、18年重光外相秘書官。戦後は国連大使、ユーゴスラビア大使。著に「ドキュメント・戦争と外交」

富岡 定俊(とみおか・さだとし)

明治30(1897)～昭和45(1970)長野県生まれ。海軍少将。海大教官を経て昭和15年軍令部作戦課長、19年作戦部長

富岡の言葉

「この時までの私は心から降伏はしていなかった。しかし、マッカーサーの恩響の彼方にある大らかな気持、それに引き替え何と小さな島国根性だったかと、心の底から打ちのめされた気持だった。ペルリ提督の星条旗を飾った心が初めてわかった」

ペルリ(M. C. Perry)

1794～1858 東インド艦隊長官の嘉永6年浦賀に来航、翌年の安政1年に幕府との間に日米和親条約を調印した

戦争被害(昭和23年経済安定本部)

♦死亡		♦負傷不明
陸軍	1,140,429	295,247
海軍	414,879	14,155
国民	299,485	368,830
計	1,854,793	678,232

♦国富の被害 653億円(残存国富の3分の1)

[illegible]

[illegible]

[illegible]

「八月十五日 戦争終わる」関係年表

嘉永 6	1853	6. 一	ペルリ提督率いる米艦隊、浦賀来航
明治27	1894	8. 1	清国に宣戦布告。日清戦争始まる
28	1895	4. 17	下関で日清講和条約調印
		4. 23	露・独・仏が三国干渉
		5. 4	日本、遼東半島を清国に返還
33	1900	6. 20	義和団、北京の各国公使館を包囲
37	1904	2. 10	ロシアに宣戦布告。日露戦争始まる
38	1905	9. 5	日露講和条約調印。南樺太、日本領に
昭和 6	1931	9. 18	柳条湖で満鉄爆破。満州事変始まる
12	1937	7. 7	盧溝橋事件勃発。支那事変始まる
14	1939	9. 1	第2次世界大戦始まる
15	1940	9. 27	日独伊三国同盟、ベルリンで調印
16	1941	4. 13	日ソ中立条約調印(有効期間21年4月)
		6. 22	ドイツ軍、ソ連に侵攻。独ソ戦始まる
		10. 18	東条英機内閣発足。東条は陸相兼任
		12. 8	太平洋戦争始まる。真珠湾攻撃
17	1942	6. 5	ミッドウェー海戦。主力空母4隻喪失
		8. 7	米軍、ガダルカナルに上陸開始
18	1943	9. 8	イタリア無条件降伏
19	1944	7. 7	サイパン島守備隊玉砕
		7. 18	東条内閣総辞職
		7. 22	小磯国昭内閣成立。海相に米内光政
		10. 20	米軍、レイテ島に上陸
		10. 25	神風特別攻撃隊、レイテ沖に出撃
20	1945	1. 9	米軍、ルソン島リンガエン湾に上陸
		1. 19	大本営、本土決戦の「決号作戦」決定
		2. 4	米英ソ三国首脳、ヤルタで会談◆スターリン、独降伏後の対日参戦約束
		3. 10	B29、東京大空襲。下町全滅
		4. 1	米軍、沖縄本島嘉手納海岸上陸
		4. 5	小磯内閣総辞職、鈴木貫太郎に大命◆ソ連、日ソ中立条約不延長を通告
		4. 7	鈴木内閣成立。陸相に阿南惟幾、海相に米内◆戦艦大和、沖縄特攻で沈没
		4. 9	外相に東郷茂徳
		5. 7	ドイツ、連合軍に無条件降伏
		5. 14	最高会議「和平にソ連仲介」方針決定
		6. 23	沖縄の日本軍、組織的抵抗終わる
		7. 16	米が原爆実験成功
		7. 17	米英ソ三国首脳、ポツダム会談開く
		7. 26	ポツダム宣言発表(米英中首脳連名)
		8. 6	広島に原爆投下
		8. 8	下村宏情報局総裁、玉音放送を奏上
		8. 9	ソ連軍、満州などに一斉に侵攻◆長崎に原爆投下◆午後11時50分 天皇臨席のもとで最高戦争指導会議を開く
		8. 10	午前2時過ぎ 「国体護持1条件に絞り受諾」の東郷案と「4条件」主張の阿南案が3対3で対立、鈴木首相は「聖断」を仰ぎ最初の「終戦の聖断」下る
		8. 11	竹下正彦中佐、椎崎二郎中佐、畑中健二少佐ら「クーデター決行」を決める
		8. 12	午前零時45分 「バーンズ回答」を傍受◆8時半 梅津美治郎(参謀総長)豊田副武(軍令部総長)「受諾拒否」を上奏◆午後3時 閣議で再照会論が大勢に◆9時半 内大臣木戸幸一、鈴木を呼び出し、「動乱等起こることありても終戦断行」に意見一致
昭和20	1945	8. 13	午前9時 最高会議は3対3で依然対立◆午後4時 閣議は12対3で受諾が大勢になるが、鈴木は重ねての「聖断」を予告
		8. 14	B29、降伏条件のビラ散布◆午前8時40分 鈴木、木戸、「天皇直々のお召」の御前会議を奏請、天皇も同意◆10時 元帥会議を開き、「終戦に決したから軍は従うべし」の大元帥命令◆10時30分 戦況報告最後の大本営発表◆10時50分 最高会議と閣議の合同御前会議開く◆正午 2度目の終戦の聖断下る◆午後1時 政府、臨時閣議で終戦手続き進める◆阿南、陸軍省全将校を集め「承詔必謹」訓示◆2時40分 「陸軍ノ方針」決定し6首脳署名◆4時 閣議で玉音放送決定◆陸軍、終戦の機密電を各軍司令官に打電◆8時半 詔書出来上がり全閣僚副署◆11時 天皇署名、御璽を捺され、発布の手続き終わる◆連合国に、ポツダム宣言受諾電報を発送◆阿南、鈴木を訪ね訣別の辞◆11時20分 玉音放送の録音始まる
		8. 15	午前零時 政府、記者会見を開き終戦発表◆畑中、椎崎が「午前2時を期し近衛師団蹶起」を竹下らに伝える◆1時~2時 森赳師団長蹶起拒否、畑中が拳銃発射、上原重太郎大尉(航空士官学校区隊長)が軍刀で斬り、同席の白石通教中佐も斬殺◆古賀秀正少佐(近衛師団参謀)、偽師団命令◆2時頃 田中静壱大将(東部軍司令官)は軍命令を出し鎮圧に◆4時過ぎ 佐々木武雄大尉ら首相官邸襲撃、鈴木邸を焼き払う◆5時頃 阿南自決◆畑中、椎崎は放送局で真意放送を迫るが、拒否される◆7時21分 「玉音放送」予告アナウンス始まる◆10時~11時半 木更津、百里原から、海軍特攻機9機出撃◆畑中、椎崎、皇居前で拳銃自決◆正午 終戦の玉音放送◆古賀、拳銃自決◆午後3時50分 鈴木内閣総辞職◆5時 宇垣纏(第5航空艦隊長官)率いる11機、沖縄へ出撃。8機17人は帰らず
		8. 16	井上靖、大阪毎日朝刊に「今日も明日も筆をとる!」◆大西滝治郎(軍令部次長)割腹自決◆海軍第302航空隊(厚木)が徹底抗戦のビラ撒布
		8. 17	東久邇内閣スタート。外相に重光葵
		8. 18	上原大尉、航空士官学校で自決
		8. 19	降伏打ち合せにマニラに使節団派遣
		8. 21	小園安名大佐(302航空隊司令)を海軍病院に収容、厚木の反乱終息へ
		8. 24	田中静壱大将自決
		8. 27	マッカーサー元帥(連合軍最高司令官)厚木着
		9. 2	戦艦ミズーリ号で降伏文書調印式。全権は重光(政府代表)、梅津(軍部代表)
		9. 11	東条元首相、拳銃で自決を図り未遂
		9. 12	杉山元元帥自決、夫人も後を追う
		12. 16	近衛文麿元首相、戦犯に指名され服毒
22	1947	9. 10	安達二十三中将(第18軍司令官)自決
23	1948	4. 17	鈴木貫太郎、関宿で死去

終戦詔勅

朕深ク世界ノ大勢ト帝国ノ現状トニ鑑ミ非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ収拾セムト欲シ茲ニ忠良ナル爾臣民ニ告ク

朕ハ帝国政府ヲシテ米英支蘇四国ニ対シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ

抑帝国臣民ノ康寧ヲ図リ万邦共栄ノ楽ヲ偕ニスルハ皇祖皇宗ノ遺範ニシテ朕ノ拳々措カサル所曩ニ米英二国ニ宣戦セル所以モ亦實ニ帝国ノ自存ト東亜ノ安定トヲ庶幾スルニ出テ他国ノ主権ヲ排シ領土ヲ侵スカ如キハ固ヨリ朕カ志ニアラス然ルニ交戦已ニ四歳ヲ閲シ朕カ陸海将兵ノ勇戦朕カ百僚有司ノ励精朕カ一億衆庶ノ奉公各々最善ヲ尽セルニ拘ラス戦局必スシモ好転セス世界ノ大勢亦我ニ利アラス加之敵ハ新ニ残虐ナル爆弾ヲ使用シテ頻ニ無辜ヲ殺傷シ惨害ノ及フ所真ニ測ルヘカセサルニ至ル而モ尚交戦ヲ継続セムカ終ニ我カ民族ノ滅亡ヲ招来スルノミナラス延テ人類ノ文明ヲモ破却スヘシ斯ノ如クハ朕何ヲ以テカ億兆ノ赤子ヲ保シ皇祖皇宗ノ神霊ニ謝セムヤ是レ朕カ帝国政府ヲシテ共同宣言ニ応セシムルニ至レル所以ナリ

朕ハ帝国ト共ニ終始東亜ノ解放ニ協力セル諸盟邦ニ対シ遺憾ノ意ヲ表セサルヲ得ス帝国臣民ニシテ戦陣ニ死シ職域ニ殉シ非命ニ斃レタル者及其ノ遺族ニ想ヒヲ致セハ五内為ニ裂ク且戦傷ヲ負ヒ災禍ヲ蒙リ家業ヲ失ヒタル者ノ厚生ニ至リテハ朕ノ深ク軫念スル所ナリ惟フニ今後帝国ノ受クヘキ苦難ハ固ヨリ尋常ニアラス爾臣民ノ衷情モ朕善ク之ヲ知ル然レトモ朕ハ時運ノ趨ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ヒ難キヲ忍ヒ以テ万世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス

朕ハ茲ニ国体ヲ護持シ得テ忠良ナル爾臣民ノ赤誠ニ信倚シ常ニ爾臣民ト共ニ在リ若シ夫レ情ノ激スル所濫ニ事端ヲ滋クシ或ハ同胞排擠互ニ時局ヲ乱リ為ニ大道ヲ誤リ信義ヲ世界ニ失フカ如キハ朕最モ之ヲ戒ム宜シク挙国一家子孫相伝ヘ確ク神州ノ不滅ヲ信シ任重クシテ道遠キヲ念ヒ総力ヲ将来ノ建設ニ傾ケ道義ヲ篤クシ志操ヲ鞏クシ誓テ国体ノ精華ヲ発揚シ世界ノ進運ニ後レサラムコトヲ期スヘシ爾臣民其レ克ク朕カ意ヲ体セヨ

裕仁　御名御璽

昭和二十年八月十四日

内閣総理大臣男爵	鈴木貫太郎
海軍大臣	米内　光政
司法大臣	松阪　広政
陸軍大臣	阿南　惟幾
軍需大臣	豊田貞次郎
厚生大臣	岡田　忠彦
国務大臣	桜井兵五郎
国務大臣	左近司政三
国務大臣	下村　宏
大蔵大臣	広瀬　豊作
文部大臣	太田　耕三
農商大臣	石黒　忠篤
内務大臣	安倍　源基
外務大臣兼大東亜大臣	東郷　茂徳
国務大臣	安井　藤治
運輸大臣	小日山直登